

今野晴貴著『ブラックバイト 学生が危ない』岩波新書（2016年）

違法なサービス残業など劣悪な労働環境がまかり通っている企業、いわゆるブラック企業の存在が社会問題化して久しい。近年、これと似た「ブラックバイト」という表現を目にすることが多くなった。字面からすると、単に「ブラック」なアルバイト全般を指す印象を受けるが、この問題を指摘してきた中京大学の内裕和教授によると、いわゆるフリーターなどではなく、大学生・高校生など学生のアルバイトを念頭に置いているということである。本書でも、「学生を使いつぶすアルバイト」、「学生であることを尊重しないアルバイト」としている。

著者の今野氏は、若者の労働相談を受け付けるNPO法人「POSSE」の代表として学生の労働相談に携わってきており、また、「ブラック企業対策プロジェクト」の共同代表としてアルバイトの実態調査なども行ってきた。それらの相談活動や調査結果などから、ブラックバイトが猛威を奮う原因を、雇用する企業側と働く学生側の両面から分析し、この問題の背後にある社会の変化を見出し、どのようにすべきかを提案している。

第1章「学生が危ない ブラックバイトの実態」では、外食チェーン店、コンビニチェーン店、個別指導塾、牛丼チェーン店の4つの事例について、企業名を明らかにしながら紹介し、「学生であることを尊重しないアルバイト」であるブラックバイトという問題を指摘し、どのような動きをしてきたかを概観している。第2章「ブラックバイトの特徴」では、より多くの事例を挙げて、①『学生の「戦力化」』、②『安く、従順な労働力』、③『一度入ると、辞められない』といったブラックバイトの特徴を分析するとともに、この問題が高校生にまで広がっていると指摘している。第3章「雇う側の論理、働く側の意識」では、「なぜブラックバイトが成立してしまうのか」という点について企業側と学生側、双方の要因を分析している。ブラックバイト問題を惹き起こしやすい業種として商業・サービス業を挙げており、労働の単純化・定型化・マニュアル化によって学生アルバイトが基幹的労働を担っていることと、アルバイトだけでなく社員もまた同様に過酷な労働に追われ、アルバイトを駆り立てざるを得ない構造になっていると指摘する。学生側の要因としては、責任感ややりがいを利用されることや、法規範と権利意識の希薄さ、学生の貧困化も要因になっているという。第4章「どうすればいいの？—対策マニュアル」の前半では、様々なトラブルの典型例を提示したうえで、どのような点が問題であるか、どのように証拠を残すか、そしてどこに相談すべきか、という点を具体的に示すとともに、学生アルバイトの労働組合などが各地に発足してきていることと、その実践などを紹介している。第5章「労働社会の地殻変動」では、日本の労働の変化、学生を守るための政策について触れ、最後は、サービスを受ける消費者が意識を変え、サービスの背景を知ることと、情報を得て選択することが必要だ、と締めている。

全体的には、ブラックバイトの特徴、背景、対処などを、具体的な事例を多く用いて説明することで、理解しやすいようにまとめられている印象である。しかしながら、労働組合による相談や交渉の事例が数多く挙げられている一方、労働組合という組織自体にはあまり触れていない。労働組合は単に相談や団体交渉を「してくれる」という性質の組織ではなく、また、特に学生には馴染みのない存在である。「労働組合に加入すること」というについてもあわせて知ることができれば、ブラックバイトなど労働問題への理解がより深められるのではないかと思う。

（浅香 徹）